本賞

ドキュメンタリーの原点というべき作品

春原 雄策　吉田 喜重

第 37 回放送文化基金賞 テレビドキュメンタリー番組の本賞は『封印された原爆報告書』(NHK 広島放送局) に輝いた。被爆から 65 年、今年この作品が選ばれた理由、原爆の作品を作り続けること、取材する者の責任、テレビドキュメンタリー番組の存在意義とは……吉田喜重ドキュメンタリー番組審査委員長が春原雄策チーフ・プロデューサーと語り合った。

吉田　テレビドキュメンタリー番組本賞、おめでとうございました。

春原　ありがとうございます。この番組については、局内外でも賛否両論ありましたので、今回の受賞は嬉しかったです。

吉田　今年のテレビドキュメンタリーの審査は、3.11 の東日本大震災、そして福島第一原発事故がたえず報じられている、そうした緊張のさなかに行われました。私を含めて審査員一人ひとりが、例年にもまして審査の基準について改めて考えるとともに、ドキュメンタリーとは何か、その果たすべき役割を問い直さざるをえなかったのも確かです。

もちろん今回エントリーされた作品はそれ以前に作られており、大震災と原発とは関係のないものでしたが、刻々とその悲惨さを伝えるテレビ映像と重ね合わせながら、審査せざるをえなかったといっても過言ではありません。

春原　この番組は、66 年前のできごとですが、現在にも通じる話として見てもらいたいと制作しました。放送後に、東日本大震災が起きて、こちらの意図を超えたところで、国のあり方や被災者に対する向き合い方などオーバーラップして見ていただいたのだと思います。

原爆を追い続けること

吉田　3.11 の惨状を目の当たりにして、被災者への日本政府の対応にもどかしさと怒りを感じる人は多かったと思いますが、今回の『封印された原爆報告書』を見て、終戦時と同様に、現在もまた、残念ながら歴史が繰り返されることを思い知らされました。かつて広島、長崎の被爆者の方たちに国が犯した過ちが、いま東北の人たちにも行なわれている。今回の作品より、そう

した批判を読み取らざるをえなかった。それが審査委員会が満票で、この作品を本賞に選んだ理由だと思います。

いうまでもなく『封印された原爆報告書』は、NHK広島放送局で制作しています。これまで私は長くドラマの審査を担当してきたのですが、2005年の第31回放送文化基金賞からドキュメンタリー部門に移り、それからもNHK広島放送局が制作する原爆をテーマにした作品を幾本も見てきました。

最初の年の第31回には『復興～ヒロシマ・原子野から立ち上がった人々～』が、そして翌年の第32回にも『被爆者 命の記録～放射線と闘う60年～』が、2年連続して本賞を受賞しています。前者の『復興』は声高に原爆を描くのではなく、耐えながら原爆を乗り越えていく市民の姿を力強く捉えた作品でした。また、『被爆者 命の記録』は、被爆者に対する救済を続けていくことの至難さを追究する番組でした。それぞれ視点の異なる両番組でしたが、ともに高く評価された。またNHK福岡放送局の制作ですが、2009年の第35回では、『解かれた封印 ～米軍カメラマンが見たNAGASAKI』が本賞を受賞しています。

この6年の間に3度も原爆をテーマにした作品が受賞していることは、NHKの原爆に対する強い思い入れの表れだと思いますが、このように毎年8月に放送される原爆をテーマにした作品を、広島局ではどのように受け止めているのでしょうか。お聞きしたいと思います。

春原　NHK広島放送局では、被爆地に勤める者の使命として原爆のドキュメンタリーを作り続けてきました。これまでのテーマの主流は大きく2つあって、原爆で亡くなった方々や戦後ずっと原爆症に苦しんできた方々に寄り添った、いわゆる“原点もの”といわれる作品、そしてもう一つが、原爆の放射線がいかに人体を傷つけるのかといった核兵器の脅威を描いた作品でした。どちらも大事なテーマです。でも最近では、原爆を扱った作品を制作しても広島ではあまり見ていただけないというか、もう見たくない、といった声も正直少なくありませんでした。

吉田　わかります。私自身も原爆をテーマにした映画を制作した折り、最初の試写会を広島で開いたのですが、特に若い世代の市民には原爆については語りたくないという、拒絶反応があることを身をもって知りました。

春原　だから、原爆に対してこれまでとは違うアプローチはできないのか、とディレクターと話し合ってきました。そこで思い立ったのが今回のような“構造もの”でした。つまり、なぜ罪もない人たちが犠牲になり今も苦しみ続けなければならないのか、その背後にある構造的な問題に目を向けなければならないと思ったのです。

吉田　今回の作品には、これまでの作品とは視点の違いを感じました。ディレクターの松木秀文さん、そして春原さんご自身も東京の本局におられたということですが、広島とは縁がなかったお二人だからこそ、これまでとは違う視点を思い付かれたのかもしれませんね。

広島で感じた違和感を番組に

春原　3年前に松木と一緒に広島放送局へ異動になりました。私が広島に行って最初に感じた違和感が、今回の番組を作る動機につながっています。その違和感とは、8月6日の平和記念式典での総理大臣のスピーチなんです。私が3年間広島にいる間に、毎年違う総理大臣が来ましたが、異口同音に「非核三原則を堅持して核兵器のない世界を目指す」と「被爆者支援のため努力する」の2つのことは、必ず述べるわけです。

しかし、実際には、非核三原則は骨抜きで、アメリカの核の傘に守られてきた戦後があります。そして被爆者救済と言いながら、原爆症の認定から排除された被爆者は数多くいて、認定訴訟は今も続いている。このことに大きな矛盾を感じました。

“非核三原則”については、2009年に放送したNHKスペシャル『“核”はこうして持ち込まれた ～空母・オリスカニの秘密～』で取り上げました。“被爆者救済”の矛盾をテーマにしたのが、今回の『封印された原爆報告書』でした。原爆が投下されると、日本全体が被害者となります。つまり、国にとっては原爆が“免罪符”にもなった一面があるわけです。番組で取り上げた原爆調査では、日本の知力を結集して調べた報告書が、被爆者のために生かされることなく全てアメリカに渡されてしまっていました。落とされた国の責任はないのか、国民を守れなかったのか、それとも守ろうとしなかったのか、そういう国の責任を追及しなければならないという思いが、今回の番組の根底には強くありました。

吉田 この作品を見て、国家のありようを改めて考えさせられました。被爆直後から1300人にも及ぶ日本のトップレベルの医師や科学者たちが広島と長崎で調査し、報告書にまとめていながら、被爆者の治療に使われることもなく、日本政府によってすべてアメリカに渡されてしまう。そしてアメリカ政府もまた、原爆のもつ威力だけに関心があり、その資料を被爆者救済のために役立たせようとはしない。両国による国家犯罪を痛烈に糾弾している番組ともいえるのです。

『封印された原爆報告書』というタイトルにも、そうした思いが読み取れるのですが、この一万ページにわたる報告書にしても今回発見されたのではなく、すでに公表されているものを改めて追究し、白日の下にさらした。

過去のドキュメントを読み直す

春原 はい、以前から公開されています。これまでも部分的に抜粋した形で公にされていましたが、今回初めて181冊全てを取り寄せて、目を通しました。これは被爆地・広島の放送局としての執念だったと思います。資料には、個人名が記載されていますので、一人一人にあたって取材を重ねていきました。当時のことを知る人が少なくなる中で、その作業はかなりの時間を要しました。亡くなった200人を超える被爆者の解剖標本も38年も前に日本に返されていましたが、そのことは遺族の方には知らされていませんでした。番組の中で紹介した当時11歳の小野田政枝さんの遺族の方も、長崎市内に住んでいる小野田姓の家に一軒一軒に電話をかけて捜し当てました。やっとその方にたどり着いても、多くの方が原爆のことは語りたくないとおっしゃる中で、話してくださる方を見つけだすのは困難を極めました。

そうして、報告書をたどっていくと、資料自体は数字や科学的なデータでしかないのですが、その背後には一人一人の人生や家族の存在が見えてきます。実際に取材してお話を伺うと、それは単なる数字ではないことを改めて気づかされました。

吉田 誰も傷つかないようにと考えたからでしょうか、部分的にしか公開されず、もっとも知る権利のある被爆者の方たちには知らせなかった。それこそが日本人的な発想であり、日本人の無責任の構造そのものというほかはありません。そしてきびしく追及されることなく、歴史の彼方に封印してしまう。

今回の作品は原爆をテーマにして制作された数多くの作品の中でも、有数の作品だと思います。すでに公開されている公文書を一から丹念に調べ直し、65年も過ぎたあのときの状況を再生していく。この地道な方法こそがドキュメンタリーの原点であり、過去のドキュメントはいまも生きており、新たに読み直されることを願っているのです。それを実現することに成功したのが、今回の作品だった。それに報告書の内容を実証、確認する作業は、すでに当事者の方たちがご高齢であることを考えれば、生きた証言を取材できる最後の、貴重なチャンスでもあったのです。

日本のドキュメンタリーの歴史は、原爆の投下から現在に至るまでの間に、何をそこに読み取るか、その学習の歴史でもあったと思います。私たちのドキュメンタリーの原点は広島、長崎

春原 雄策 さん （すのはら・ゆうさく）

NHK 大型企画開発センター チーフ・プロデューサー

1988 年 NHK 入局。NHK スペシャルやクローズアップ現代を中心に、ドキュメンタリー番組の制作にあたってきた。2008 年 6 月から 3 年間広島局に勤務し、原爆関連番組の制作に携わる。2011 年 6 月から現職。主な作品は、N スペ『よど号と拉致』（ABU 賞）、N スペ『ひとり団地の一室で』（「地方の時代」映像祭グランプリ）、N スペ『ワーキングプア』（新聞協会賞・ギャラクシー大賞・放送文化基金賞）、N スペ『"核"はこうして持ち込まれた』（JCJ 賞）など。

にあるといっても過言ではありません。

お聞きしたいのですが、春原さんご自身はNHK という大きなテレビという媒体、その組織の中におられ、そうした立場からドキュメンタリーを作ることと、一個人のプロデューサーとして作ることに、何か違いを感じていますか？

悲劇を繰り返さないために

春原　私個人としては、まず一人称で作っています。取材者が現場で感じたことを大切にしたいからです。そして取材した事実と証言して頂いた方々の裏付けに基づいて、公共放送として、テレビとして、どこまで言えるのかを考えます。番組の中に“浮かび上がってきたのは、被災者の救済よりもアメリカとの関係を優先させていた日本の姿です”という強いコメントがあるのですが、広島で被爆者と直接向き合ってきた取材者の責任として、あえて覚悟を決めて言い切っています。

吉田　それは当然のことでもありながら、勇気が要ることでもあることは、作品を通してじゅうぶん読み取ることができます。春原さんは、この 6 月の NHK の人事異動で広島から東京に戻ってこられ、またドキュメンタリーを含めた報道活動をされるわけですが、次の作品など、お考えになっていることをお話ください。

吉田 喜重 さん （よしだ・よししげ）

テレビドキュメンタリー番組審査委員長

春原　やはり 3.11、福島第一原発事故です。大それた事は言えませんが、広島の悲劇を繰り返させてはならないと思っています。福島の原発は、実際にどれだけの被害が出ているのか今もってわかっていません。被災された方々のためにも、きちんと調査しないといけない。かつて広島にいて東京に戻ってきている仲間と、今も広島にいる仲間と連携して“広島から福島へ”というテーマで番組を作りたいと思っています。広島で培った経験をどう福島に生かすのか、健康被害や放射能汚染の実態調査や補償のあり方など、やらなければならないテーマが山積しています。そうした課題に今しっかりと向き合わなければ、また同じ事を繰り返すだけです。

吉田　今後のご活躍を期待しています。本日は有難うございました。

「封印された原爆報告書」概要

アメリカの公文書館には、原爆被害の実態を調べた約 180 冊におよぶ報告書が眠っている。報告書をまとめたのは、総勢 1300 人に上る日本の調査団だ。終戦直後から約 2 年間も調査が行われたが、結果はすべてアメリカに渡されていたのだ。貴重な資料はなぜ、被爆者のために生かされることなく封印されたのか？

報告書に埋もれていた原爆被害の実相に迫るとともに、戦後、日本がどのように被爆の現実と向き合ってきたのかを検証する。